
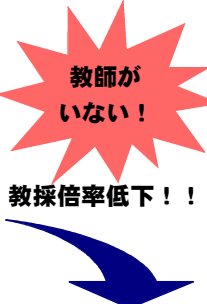





## 小学校の教員が一層過酷になる理由

浜中町立茶内小学校長 富田直樹

前号の終わりにお伝えしたとおり、小学校が一層過酷になる構造的な問題について考えてみたいと思います。理由としては、次の3点が考えられます。

 <p>授業時数の増加 授業力の質の向上</p>	<b>理由1：授業時数の増加と求められる授業力の質の向上</b> 小学校においては、2020年度から学習指導要領が全面実施になりました。その中で、第3・4学年に外国語活動（週1時間）、第5・6学年に外国語（週2時間）が加わりました。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る授業改善が求められています。このためには、学習指導要領を時間をかけて読み込み、これまでに以上に授業力の質の向上を図らなければなりません。
 <p>教師がない！ 教採倍率低下！！</p>	<b>理由2：教員、期限付き教員不足</b> 産休・育休を取る教員の代替の教員がなかなか見付からない、あるいは年度途中で体調を崩して病気休職となった教員の代わりが来ないという人手不足の問題は、全国で深刻です。そのため、本来配置されるべき教員がいない状況で、今いる教員の担当授業を増やすなどして、歯を食いしばるようにして、何とかもちこたえている学校も多くあります。週29コマ全て埋まっている教員もいます。また、近年、教員採用試験の倍率が下がっています。倍率が低いということは、不合格者が少ないということです。不合格者が期限付き教員登録していることが多いので、倍率低下は期限付き教員不足を意味しています。
 <p>不安だな 大丈夫かな</p>	<b>理由3：学級経営や授業に不安を抱える教員が一部とはいえ、少なくない</b> 一概に若手だから問題があるなどと断定することはできませんが（実際、本校の岡村教諭、津田教諭とも優秀）、教職経験が浅い教員が多い小学校は全国にたくさんあります。ベテランであっても、従来の指導方法では特性のある子どもにはうまく指導できず、子どもとの関係性をつくれないうケースもあります。学級崩壊しかかっている学級があったり、授業が深刻な教員がいたりすると、教頭や他の同僚は、空き時間を返上してヘルプに入ります。

本校においても、少なからず理由1と理由2は当てはまります。

ここで、小学校の教員が一層過酷になる理由を別の視点から確認していきます。高等学校（以下、高校）の教員はどうなのでしょう（高校の教員を責めるわけではありません）。高校も部活動や進路指導等で多忙ではありますが、小・中学校と比べるとかなり恵まれています。国の「学校教員統計調査」によると、公立高校の場合、担当授業時数が週20コマ未満の教員は「86.1%」を占めますし、授業をもつ教員の平均授業時数は週に「15.4」コマです。

つまり、小学校と高校の教員の間では、担当する授業時数が週で約10コマないしそれ以上も違うのです。さらに、高校では給食指導や休み時間の見守りもほとんどありません。同じ地方公務員でありながら、なぜこれほど違うのでしょうか。それは、中学校、高校では教科担任制のため、教員の数が小学校よりも手厚く配置されているためです。一方の小学校は学級担任制を前提としているため、9教科も10教科も学級担任が1人で指導する体制の予算と人手しか付かないのです。つまり、制度、政策の問題なのです。制度、政策は一朝一夕で変わるものではありません。だからこそ、学校における働き方改革を進める必要があるのですが……。